

性役割意識や性役割観が承認欲求およびセルフ・モニタリングへ及ぼす影響

○吉岡真梨子¹・井上弥²

(¹広島大学大学院教育学研究科・²広島大学)

問題と目的

柏木(1967)は、性役割学習には、自分の性に期待されている役割がどのようなものかを認知すること、およびその役割を演ずることの2つの過程が含まれていると述べている。人は他者からの性役割期待を認識し、自らに取り込むとともに、期待される性役割行動を呈示している可能性があるといえるだろう。このことから、性役割学習によって形成された性役割意識や性役割観と、自己呈示に影響する個人内要因には関連がみられると推測される。

以上より本研究では、性役割意識と性役割観が、承認欲求やセルフ・モニタリングとどのように関連しているのか、構造的に検討する。その際、男女における構造の違いにも着目する。

方法

参加者 大学生 53 名 (男性 20 名, 女性 33 名)。
質問紙 性役割意識は M-H-F scale (伊藤, 1978) の 30 項目を 7 件法で、性役割観は性差観スケール (伊藤, 1997) から因子負荷量が .50 以上である 16 項目を 4 件法で測定した。承認欲求として、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 (小島・太田・菅原, 2003) の 18 項目を 5 件法で測定した。セルフ・モニタリングはセルフ・モニタリング尺度 (岩淵・田中・中里, 1982) の 25 項目を 5 件法で測定した。

結果と考察

まず、セルフ・モニタリング尺度について、最尤法プロマックス回転により因子分析を行なった。因子負荷量が .35 に満たない 5 項目を削除し、再度因子分析を行なった結果、「内向性」と「演技性」と解釈される 2 因子が得られた。

次に、性役割観得点 ($\alpha = .83$), Masculinity ($\alpha = .87$), Humanity ($\alpha = .73$), Femininity ($\alpha = .74$) が賞賛獲得欲求 ($\alpha = .83$), 拒否回避欲求 ($\alpha = .76$), 内向性, 演技性にそれぞれ影響を及ぼし、性役割意識の各因子間には相関があるという仮説モデルを設定し, R 3.4.1 の lavaan (0.5-23.1097) を用いて、共分散構造分析による仮説モデルの検証を

行なった。その結果, Masculinity から賞賛獲得欲求に正のパス, 内向性に負のパスが, Humanity から拒否回避欲求に負のパスが, Femininity から拒否回避欲求に正のパスが, 性役割観得点から演技性に正のパスが有意だった。また, 性役割意識の各因子間には正の相関, 賞賛獲得欲求と内向性に負の相関がみられた。適合度指標を算出したところ, CFI=1.00, RMSEA=.00, SRMR=.04 でモデルの適合度は高かった。

続いて性別における多母集団同時分析を行なったところ, 男性では Figure 1, 女性では Figure 2 のようなモデルが得られた。2 群のパス係数の差を比較したところ, Humanity から拒否回避欲求へのパスにおいて有意な差がみられた ($z=2.19$, $p<.05$)。また, Femininity から演技性へのパスにおいて有意な差がみられた ($z=2.49$, $p<.05$)。

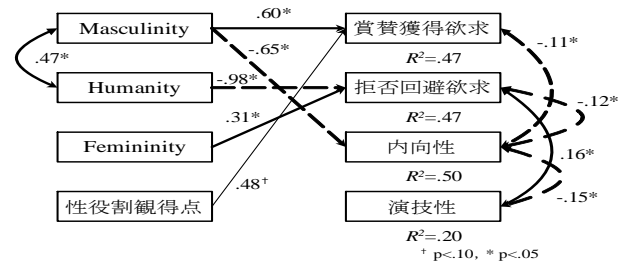


Figure 1 男性におけるパス図

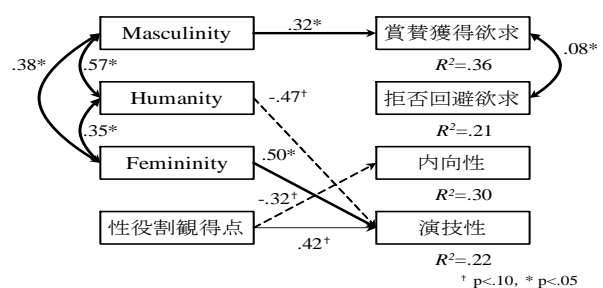


Figure 2 女性におけるパス図

これらの結果から、性役割意識や性役割観は、性別によって承認欲求やセルフ・モニタリングに異なる影響を及ぼしていることが示唆された。女性では Femininity が演技性を高めており、女性性が高いほど周囲の性役割期待に沿った自己呈示を行なう可能性があると考えられるだろう。